

昭和二十一年二十四年 四〇、一〇、二八各收容所を

転属する

昭和二十四年七月二十六日 舞鶴に上陸帰国

七月三十日 郷里現住所に帰る

(福井県 林 俊男)

シベリア抑留を顧みて

福井県 尾上敏雄

あの厳しかった抑留生活から解放されて五十有余年が過ぎた。その頃の記憶は薄れていくが、是非とも忘れてならないことだけでも、断片的だが書き残したい。

私は昭和二十年二月初め、中部第三六部隊(敦賀)より、新設部隊要員として、満州国黒河省孫呉に到着、同年四月五日に第一一七師団、第二七〇連隊が編成された。連隊長は宮城に出向き軍旗拝受。私は同連隊の通信中隊の内務係を拝命し服務した。

同年八月一日遼陽の幹部教育隊に派遣、その教育に専念。その頃戦況は日ごとに悪化するばかりで、八月九日ついに日ソ開戦となった。でも我々の教育はその時点では続行していた。十三日になって解散し直ちに各自、原隊復帰の命令が出た。私は孫呉の同僚とともにハルビン市まで行き、原隊へ連絡するも応答なし。そこでハルビン市内防衛の混成第一三一旅団司令部に仮配属となった。当時のハルビン市内日満会館には旅団長司令部があり(旅団長井部信時少将)、私は司令部の通信業務に従事することになった。

八月十五日ついに来るべきものが来た。正午、天皇の玉音放送があった。私は通信室で日本の降伏を知り、筆舌に尽くし難く空しさと、敗戦の惨めさに涙が出てきた。

思えば渡満してわずか六カ月。日満会館に集結した同僚の一人は、敗戦を悲しんで拳銃で自殺した。たしか二十日の日だったと思う。ソ連軍の命令で、ハルビン市郊外の某日本兵舎に移動し、そこで武装解除された。この時点でソ連軍の指揮下に入り、本当の捕虜扱

いとなった。私たちも天皇陛下の御為、御国の御為と教育され、ただ勝つことのみの教育ばかりで、敗戦してそれ以後の方針や教育は一つもなかった。それ故に愕然とするばかりだった。話によると旅団長は飛行機で連れ去られ、次に将官級以上はモスクワへ集結されるという。そして、下士官兵はここに数日間滞在せよとのことだったが、下士官兵はすぐ移動命令が出た。着のみ着のまま鉄道線路を徒歩での行軍、夜は所かまわず野宿。この集団には在留邦人も同行していた。あ

る一人の女性は乳児を背負い、四、五才くらいの幼児の手を引いて歩行していたが、この幼児は空腹と疲労で半分眠りながら、また泣きながら、母の手に引きずられるようだった。見るに見かねた私は、とりあえずわずかばかりの乾パンを与えた。母親は涙してお礼を言ってくれた。

東満鉄道路を北進中、山の中に分駐していた一個分隊ほどが敗戦を知らぬようだった。敗戦のことを伝えたが、私たちの言葉を信用せず、また元の山の方へ帰って行った。以後のことは知る由もない。

ちょうど出発してから一週間を過ぎた頃、持って来た食糧もなくなつた。歩行中はもちろん、また夜間暗くなるのを待って、食べ物探しに夢中だった。そして牡丹江郊外の日本軍火薬庫の近くで約一カ月滞在したが、その毎日を食糧探しに夢中だった。ソ連の監督はいつもつききりだったが捕虜という実感はなかった。ここで第四軍の兵隊を集結させた。司令官は後宮大將。そして長谷川高級参謀が総指揮官だった。ここで作業大隊が編成された。

一個大隊千人単位で四十個大隊を編成。三八大隊までは兵隊で、三九大隊は准士官から下士官、そして四〇大隊は将校だった。従って私は三九大隊だった。

十一月十九日、牡丹江から貨車に乗せられて（一両五十人、監視二人付き）当地を出発した。監視のソ連軍ロスキーは「ヤポンスキー東京ダモイハラシヨ（日本人の兵隊、東京へ帰る、良いだろう）」と言っていた。

この言葉を信じて喜んでいた者と、またその言葉は欺瞞で、我々をソ連の陣地構築に連れて行き、終われ

ば銃殺と言う悲観者もいた。

十一月三十日、ソ連領に入って行った。そして汽車はウオロシロフを経て北に向かつて走った。同僚はまだ内地へ帰ることを信じていた。今度はニコライエフスクから樺太を経由で帰るのだと言う者もいた。私は「これは大変なことになった、このままでは内地へは帰れない、しかし命があればいつかは帰れるだろう」と、自分に言い聞かせていた。

汽車は十二月一日、コムソモリスクから森林鉄道に入り、北東に数時間走ってやっと止まった。そこで下車命令が出た。出て見れば原森林は銀世界一色だった。そしてここで防寒被服や防寒靴等が支給された。捕虜生活の第一歩である。一列に並んで雪道を歩いた。食物も与えられず空腹のままだった。そして大きな建物の中へ入って一夜を明かした。夜が明けるとその倉庫の周辺には幌をかけたトラックが数十台、待機しているようだった。このトラックに私たちが三十人ずつ乗せられ、ソ連監督二人付きで車は走った。幌をかけているため外は見えず、野原か森林道か分からない

道を走り続けた。寒さと空腹で誰一人しゃべる者もない。夕方暗くなって車は止まり、下車命令が出た。降りてみると見わたす限りの森林地帯、そしてそこかしこに点々と撤収した幕舎の跡があった。後日分かったが、この幕舎にドイツ兵の捕虜が収容されていたとのこと。そしてこの幕舎にとりあえず私たちが入ることになった。上下二段、一ます（二メートル×二メートル）に十人ずつ。丸太を組んだその上に乾草を敷き毛布一枚が支給された。夜中、小便に起きて用を終えて戻って来ると、もう寝る場所はない。しかたがないから次の者が起きるまで、中央のストープ周辺で暖を取り待っている。この繰り返しだった。

夜が明けて舎外に出て見た。身が引き締まるような寒さ。雪は五十センチくらいだろうか。二日ぶりに食事が出た。黒パンとスープが少量。そして食事が終わるとすぐ作業出発の号令、直ちに集合して作業に出た。ここでの作業は伐採、道路工事、建物の基礎工事等に分かれた。私は森林伐採の作業に行くことになった。これが抑留捕虜労働の第一歩だった。

この地に来て一週間くらい過ぎた頃だった。軍隊の階級章を全部外すことになった。そして階級の隔たり等はなく作業をするようになった。この時点ではノルマはなく八時間労働だった。作業によっては九時間または十時間とさせられた。食事は相変わらず朝はパン百五十グラムとスープ（半ポンド）、ミルク缶に八分目。昼と夜は雑穀のおじや。ただ空腹をしのぐ程度で、いつも淋しい思いだった。

空腹と酷寒、そして重い防寒被服をまとつての作業の連日。特に防寒大手袋をつけてつるはしを使うときの難儀なこと。そしてその頃は零下三十五度は下っていた。生きて帰りたい一心でこの作業についていた。その頃だったと思う。朝の点呼に数人の姿が見えないので、各幕舎を点検したら、既に息絶えていた。かわいそうに栄養失調で死神が迎えに来たのであろう。ここに約二カ月間滞在したが、その間に約百人ほどが栄養失調で亡くなっていった。

生きるも死ぬも紙一重くらいの線上を歩き渡ったようだ。私は田舎生まれ。特に山家育ちだったから、ど

んな環境にも耐え抜く自信はあったが、零下四十度近い酷寒と空腹、そして銃を持った監視付き、その上重労働の強制は、自分の気力にも限界を感じた。夕暮れになると望郷の念が強く、我が身もこれまでかと思いい、人目しので両手を合わせて合掌した。

この地名は知らないが相当北東、樺太の対岸付近だったと思った。夜になると北極星が頭の真上に見える、相当北の方だと思った。その頃より幕舎は次々と新しく建設された。そして今までの丸太から板の間になり、ここに住むことになった。しかし三・三平方メートル当たり八人で一幕舎（一棟当たり）三十人だったので、脊部の痛みは和らいだが、窮屈さは変わらなかった。

その頃の作業は伐採した木材の搬出や積み込み作業だった。伐採した木材を馬そりに乗せてトラックの搬出所まで送り出す。そしてここでトラックに積み込む。たしか六人一組だったと思う。二人はロープを使って巻き、四人が肩を入れて押し上げ、戻らぬように両方に楔くさを構えつつ、ヨイトマケ、ヨイシヨイシヨ

と掛け声をかけて、五メートル五十センチの原木丸太を積むのだった。歩哨も覚えて、ヤボンスキー・ヨイトマケ・ヨイシヨと物まねをして笑っていた。この仕事も終わるまでは食事は与えられず、空腹でふらふらになって宿舎へ戻った。大変な労働だったので、春を待つ四月頃までに三百人ほどが亡くなり七百人以上になってしまった。亡くなった方の姿は、あばら骨がまるで洗濯板のようで、本当に骨と皮だった。この頃にノルマ制になり、三人一組で伐採六石が一日のノルマだった。先にも述べたように、私の家は農林業だったので、伐採のときの鋸の目立ては自分でできるから、いつもノルマは午前中に一〇〇パーセントでき、ハラシヨラポータとして、午後はのんびりして帰りを待った。また、蒸気機関車用の薪割作業は案内された。

このような作業は約一カ月ほどで、今度は鉄道専用の枕木の貯木作業だった。製品された枕木を一カ所に千本積み上げるのだ。五人一組で一人が百五十本ずつ、ただしこの作業は五〇パーセントほどしかでき

ず、そのため食糧は毎回減食されるので、能率の上がるよう種々努力したが、だめだった。ここでは三カ月の間、一回も一〇〇パーセントのノルマ達成はできなかった。

我々の監督はソ連の囚人で、その上の監督はソ連の軍法会議にかかったソ連の軍人、そしてその上の監督がソ連正規の軍人とのことだった。また、日本軍捕虜の扱いはソ連内務省管轄であったようで、時折政府の高官が視察に来た。

また、業間作業といって、収容所所長の命令で労働時間外に、炊事用の薪取りや、ストーブ等の薪集め、その他所長個人の使役等に駆り出されることもあった。

ここでの作業上の機具は二人用の鋸、押す引く、そして斧くらいのものでした。しかし製材所には珍しくチェーンソーがあった。私たちは便利なものだと思っただが、これは製材所専用でソ連人のみ使用とのことであつた。

私は、二十一年六月頃、木材の積み込み中、腰を痛

め、三カ月現地の病院へ入院した。この病院には、ソ連の男の軍医さん一人と、ソ連の女医さんが数人いた。ところで私を診てくれた医師は日本人の医師だった。本職は外科専門の先生で、この病院へ入院した外科的疾患は、この先生が診療された。私も大変お世話になったので、退院時は先生の住所も電話番号等もお聞きして覚えていたが、度忘れして御礼の言葉も届けられず、今もって申し訳なく思っている。

さて、退院した私は、収容所は変わったが、作業は相変わらず木材の仕事に従事することになった。といっても雑仕事の八時間の労働で、体力の回復とともに原木の伐採作業に行くようになった。ここではノルマ制で、伐採した原木を積み上げた量を計算するのだが、私が計算すると一〇〇パーセントくらいは十分あるので、監督が計算すると足りないと言う。何回も言い合ったが聞いてくれない。誠に頭の悪い囚人監督だった。私たちも入ソして一年も過ぎ、今日では手まね足まねをして説き聞かせるが、分からないので、「ヨッポイマチ（馬鹿野郎）」と言ったら、この監督は真

っ赤な顔をして、右手を振り上げて、「日本人良くない作業この馬鹿野郎（ヤボンスキーラボータ・ニハラジョ・イピットヨッポイマチ）」と言って去って行った。

さて秋も過ぎはや雪の降る冬を迎える季節となった。降雪のときはトラックの輸送が遅れ、私たちの食糧も滞り欠食となる。すると除雪作業に駆り出され、一人五百メートルの除雪がノルマとして割り当てられた。しかし寒風が強くと雪は飛び散り、アイスバーンになって路上の歩行は滑って恐ろしかった。

ところで、この収容所の規則では、零下四十度を基準として、三十九度では舎外作業に出るが、四十度では舎内待機となった。そして三十九度になると、直ちに作業出発の命令が出て、私たちは波々歩哨（カンボイ）の後をつけて伐採に出かけた。

この冬も多くの同僚が栄養失調で亡くなった。昭和二十二年四月頃と思う。ウォロシロフ郊外の収容所に私たち千人単位の大隊も幾組もの小集団化をされた。私は二十人の組で、そのうち本職の大工が二人、残り

の十八人は準素人で、大工の見習（手元）として一作業班ができた。作業は野菜貯蔵庫の改築工事で、この作業にはノルマはなく、一日八時間で、何月何日まで仕上げ（完成）との命令だった。この作業は案内で、その上野菜等は十分いただき、食糧不足の折大変助かった。

しかしこの作業も三カ月余で終わり、その後このメンバーで、収容所近くのソ連人宿舎の補修工事や個人宿舎等の修繕、一部改築等行った。次に馬糧（乾草）運搬作業や、馬鈴薯の植付けから除草そして収穫まで、色々な仕事をさせられた。しかし、どんな作業に分かれても、歩哨（カンポイ）は監視について来た。そのため心の休まりはなかった。

電気等はなく、缶詰の空き缶に白樺の皮を細く切つて燃やして明かりを取った。夜はもちろん朝の点呼も、朝食時等、黒パンやスープの配給、配膳等真っ暗なので、白樺のおかげで大変助かった。顔も煤けて大変ではあったが。

伐採作業が遠いときは四キロメートルまでは徒歩だ

ったが、四キロメートルを超える場合は、トラックが迎えに来て、そのトラックに歩哨も乗って作業に行った。

不寝番等もあったが、皆時計がないので、一時間交代ではあったが、ずるい者は三十分または二十分くらいで次の者を起こして床に就く。正直者の私は、一時間間を二回も立哨してまだ夜が明けないこともあった。不寝番といっても軍隊のような規律正しいものでなく、ストーブの所で暖を取り、火災、盗難、そして同士たちの寝具合（病的等）、異常の有無を確認して、次の者に申し送るものだった。

入浴は、一人一桶二升くらいのお湯が割当てられたが、そのお湯で顔を洗い、身体をふく程度だった。八月の初め軍隊で風呂を浴びたのが最後で、本当にゆっくり一風呂入りしたいと思う毎日だった。

二十一年の夏頃だったか、全員の身体検査があり、ソ連の女医さんが私たち一人一人の尻の肉をつまんで一級から四級までに分けた。一、二級は所外の重労働、三級者は軽労働で、四級者は作業はなく、等級に

よって作業の量や食事の量が変わった。この身体検査も二カ月ごとにあつて、今まで一、二級者でも弱っている者は三、四級になり、ある程度身体を休めた三、四級者は今度は一、二級者となつて所外の重労働者となる、この繰り返しだった。私は身体は鍛えていたので、いつも一、二級となり大変苦勞をした。いつも空腹を満たすため休日等は近くの川に行き魚取りや、野原に出ては若草や木の芽、茸等を採取して腹の足しにし、冬場はただ雪を入れて水分を増して満腹感を味わった。あの頃は腹いっぱい食べたらいっ死んでもいい、一度でよいから腹いっぱい食べたもちを食べたい。いや何でもいい、腹いっぱい食べたいと思つていた。

二十一年の夏頃からと思うが、共産党の講義が始まつた。出席せねば反動とされるので、帰りたい一心で、作業が終わり夕食後、疲れた身体に鞭打つて二時間は学んだ。会場の正面にスターリンとモロトフの写真があり、その両横に日本の野坂参三と徳田球一両氏の写真があり、この写真に礼拝してから講義が始まつた。講義の先生は、終戦の年の六月、満州にいた朝鮮

人で日本軍隊に召集された者ばかりだった。そして終戦と同時に我々と同じく捕虜となつて来た者で、私たちの先生は阿部といつた。このウォロシロフの收容所では、週一回、ソ連政府の政治部員の方と懇談会が行われた。

この会合に我々の仲間からも指名された。私もその一人で、まず我々の主張として、第一に作業の軽減、第二に食糧の増配、第三に一日も早く内地へ帰してくれと要望した。しかしソ連の政治部員は何一つとして聞いてくれず、特に日本へ帰すということについては、日本から迎への船が来ないからと言ひ、また作業についてはソ連の目的達成に協力してくれ等言つていた。

二十二年の十一月下旬、突然移動命令が出て、收容所全員三百人が汽車に乗せられて出発。汽車は南進していた。これでやっと日本に帰れると思つた。着いた所は待ちに待ったナホトカの收容所だった。

この收容所では雑役仕事と共産党の講義とが交互に行われた。ところが私だけは病院の雑仕事を命ぜら

れ、私は皆と別れての仕事、これはひょっとすると取り残されるのではないかと内心不安だった。だが命令だから仕方なく務めていた。ある日この病院内の監視人の腕時計がなくなつた。その盗人の疑いが私に掛けられた。そしてソ連の憲兵に取り調べられた。私は大変なことになつた、このままじゃ本当に日本に帰れないかもしれないと思つたら、無性に望郷の念が募る一方、馬鹿を見たとき、やるせない心境であつた。

自分ではないことをどんなに説明しても、受け入れてくれない。その頃同僚たちは「早く乗船の準備に戻つて来い」と言つてきており、気は焦る、この難関を突破しなければならぬという苦境の時だつた。この病院の軍医さん、上海に二十年も住んでおられて日本語が上手にできる方が、私の悩んでいる姿を見て、中へ入つて色々取り計らつてくれ、調査の結果、入院中のソ連の民間人で、常習犯と分かり白状したので、私は直ちに自由帰還者の身となつた。あまりの嬉しさに、軍医さんに飛びつくようにして「ありがとうございます」と合掌し最敬礼をして乗船の隊列に入ること

とができた。

三日目の夕方薄暗くなる頃、雨の中をすぶぬれになつてナホトカ港に着いた。そこには私たちを迎えに来た日本の貨物船が岸壁に横たわつており、この船を目前にして思わず感極まつて涙が込み上げてきた。皆同じようだった。

ここでソ連最後のボディイチェックがあつた。これが終わった者から乗船となり、タラップに足を掛けると、もう後を振り向かず一段一段を無心に登り船上に飛び込んだ。

甲板上では互いに肩をたたき合つて喜んでいる。私はまず、最後のナホトカ港を眺めながら、乗船間際に助けて下さつた軍医さんに深甚なる敬意を送り、そして在ソ中に世話になつた方の中でお礼を申し上げ、一日も早く帰国されるようお祈りして、割り当てられた船室に入つて暫くすると、白米のお握りが配給された。何年ぶりだろうか。喉を通る時の旨さと喜びが涙を誘う、目頭が熱くなり呼吸の乱れを感じた。

ナホトカ港を出発。冬の日本海は相当荒れ模様だっ

たが、舞鶴港へ入る頃には波も静かだった。待ちに待った母なる国の島影が、涙の線上に浮かんでいる。遠くにまた近くの浜辺に連なる松並木、藁葺き屋根の家々、そして日の丸の旗が見えた。帰って来たんだ、本当に日本だ。甲板の上で感涙にむせぶ声がする。万感胸に迫る思い、噴き出る涙が一滴また一滴止まらない。

下船して棧橋を、祖国の土を一步また一步、その感触はシベリアのあの苦勞を忘れ去るかのようだった。そしてエプロン姿で日の丸の小旗を片手に持った婦人会の皆様が「長い間本当に御苦勞様でした」と深々と頭を下げる。感無量生きて帰れた喜びに、また止めどもなく流れ出る涙。それから引揚援護局の指示に従い、ここに三泊した。

二十二年十二月七日、検疫も終え、手当三百円を貰ってよいよ家に帰ることになった。舞鶴駅を出て敦賀駅で暫く待ち時間があつたので、駅構内の売店で柿を二個買った。貨幣価値の分からない私、二個の柿で二百円を請求された。これには驚いた。残りの錢では

到底家まで帰れないと思い、次の駅の武生で下車して伯母さんの宅で一泊し、ここで五百円を借りたが、大野でなお一泊して、十二月九日、待望の我が家に着いた。

昭和十八年十二月再度の応召以来、私は五年ぶりで家内一同に会うことができた。少年の頃より軍人にあこがれ軍隊の飯を十余年、喜びも苦しみも体験し、生死をさまよい九死に一生を得て、ようやく人並みに家族一緒の平和な生活ができるようになった。二度とあつてはならない戦争。

思えば昭和二十年二月渡満して八月九日、日ソ開戦、十五日敗戦、そして二十日捕虜取り扱いとなつた。私は日本は戦争に必ず勝つと信じていた。天も地も我らの味方、神風も吹くと聞いた。しかし敗戦となつた。戦陣訓はあつたが、敗戦訓はなかつた。この敗戦の惨めさは身をもって体験した。乗船してつくづく考えるに、まるで私はソ連の捕虜になるがために軍隊へ行つたようで、返す返すも残念だった。

二年間の抑留生活の厳しさも、私の生涯の試練だっ

た。それにしても、異国で亡くなられた同胞の心境は察するに余りある。今となっては申し訳なく、御冥福をお祈り申し上げるとともに、一日も早く遺骨を採収し、内地に御帰還されんことを念願する。

【執筆者の紹介】

経歴

大正三年十一月六日

旧大野郡西谷村で出生

昭和二年

小学校卒業、農業に従事

昭和十年一月二十日

現役兵として歩兵第三六連

隊第一中隊に入隊

十二月

満州派遣新京に駐留

昭和十一年四月

一面坡に移動ヤプロニ駐留

昭和十二年二月十日

現役満期除隊

九月十日

充員召集により歩兵第三六

連隊第一中隊（脇坂部隊）

昭和十三年三月一日

陸軍歩兵伍長

三月

疾病により上海第四野戦病

院に入院、同月二十五日内地

へ送還され広島陸軍病院へ

四月

姫路陸軍病院姫山分院転送

八月二十五日

鯖江陸軍病院転送

九月一日

退院、同連隊第一中隊へ

昭和十四年四月一日

陸軍歩兵軍曹、独立混成第

九旅団通信隊に転属

八月

北支大原駐留

昭和十六年三月一日

陸軍曹長

三月三十日

内地帰還召集解除

昭和十八年十二月一日

臨時召集により応召、中部

第三六連隊第七中隊に配属

昭和二十年二月

新設部隊要員として満州派

遣黒河省孫吳へ

四月

第一一七師団第二七〇連隊

通信中隊配属

八月十三日

学校解散、ハルビン市内独

立混成第一三三旅団配属、同

月十五日当地において終戦

昭和十三年～十六年 旧西谷村青年学校の指導員

昭和十七年 西谷村在郷軍人分会長

西谷村陸軍対空監視所所長

戦後は地域の森林組合、特産物加工組合などの理事等を務め、平成元年には大野郡市軍恩連盟事務局長に就任、現在に至る

(福井県 天谷 小之吉)

シベリア抑留記

長野県 長 田 伊三男

昭和二十年八月十五日、敗戦。私たちの所属する部隊は、奉天北陵大学に集結、ソ連軍の指揮下に捕虜となり、九月中旬、国境の町、黒河に移動しました。

町は戦いで焼かれ、線路は曲がり、砲弾はごろごろと転がっていて、戦闘の物凄さを物語っていました。

ここで十日間くらい待機させられ、その間、食糧その

他物資の積み込み作業の労務に使われました。黒龍江の上流で河幅は二〇〇メートル余、その水量と急流は物凄く、ソ連の貨物船が対岸まで横づけできないので、その間十五メートルくらい、板の棧橋をかけて自分の体重より重い七十キログラム入りの高梁や砂糖袋を積み込むのです。こたえました。その上、棧橋は狭いし揺れる、ふらついて落ちれば黒龍江の藻屑、命懸けの仕事でした。

十日ほどして、九月下旬頃だったと思いますが、私たちは、黒龍江を船で渡りブラゴエンチェンスクへ着きました。ソ連領上陸の第一歩です。港から汽車の駅までしばらく歩き乗車しました。「ヤボンスキー・ダモイ」(日本人・帰国)とソ連の兵隊に騙されているのにも知らず、それを信じて貨物車に乗り込みました。中は二段に仕切られていて、ぎっしりと詰め込まれました。これでは寝ることもできない、まるで豚かにかのよう。とても人間の輸送ではありませんでした。「汽車よ東へ走れ、そして日本へ少しでも近づけ」私たちの願いもむなしく、汽車は西へ西へと走り続けま